東松島の復興 見守る

旧徳山村撮った写真家

3年後の映画化めざす

被災者の映像を編集する大西暢夫さん＝岐阜県池田町

「今、東日本大震災の被災者は何を考え、何を語るのか。それが知りたくて、映画を撮ろうと思った」

岐阜県池田町の写真家大西暢夫さん(45)は、宮城県東松島市の仮設住宅などで暮らす被災者から津波の体験を聞き、フィルムに収めている。3年後の公開をめざす。

2011年4月、支援物資を積んだ軽ワゴン車で通りかかったとき、大西さんは、目の前に広がる光景に衝撃を受けた。

震災から1カ月たっても手つかずのがれき、さびが目立ち始めた線路、津波に流されて脱線したJR仙石線の車両――。「ほかの地域より復旧が遅れている」

それから毎月、大西さんは東松島市に出向く。陸前小野駅前の仮設住宅に設置したスタジオで、これまでに35人の被災者から津波の体験を聞き、肖像を撮影した。ある男性は、目の前で妻が津波にのまれた。「助けられなかった」と悔やみ続けている。車を運転していた女性は、水面に浮かんだ瞬間に脱出し九死に一生を得た。

こうした体験談を映画にしようと思ったのは、被災者に勧められたからだ。

大西さんは、ダムに沈んだ岐阜県の旧徳山村を舞台にして撮影した自作のドキュメンタリー映画「水になった村」を、震災から1年後の3月11日に、仮設住宅で上映した。

「あんなふうに、私たちを撮ってほしい」。仮設住宅で暮らし、がれき分別をしている60代の男性のひと言が、大西さんの背中を押したという。

「水になった村」に登場する村民は、村の大半が水没し、移住を余儀なくされても笑みを絶やさない。その姿に、被災者が自分を重ねたのかもしれないと、大西さんは思う。

「世間の関心の風化を食い止めるためにも、遅々として進まない『復興』という言葉の裏側を映画を通じてあぶり出す。そして、これからの被災者の生き方を見守り続けたい」

7日 経過報告試写

途中経過の報告を兼ねた試写会を、年数回開く。最初は7日午後4時から、岐阜県池田町八幡の「ブルースカフェ」（0585・45・1950）で。参加費1500円は制作費に充てる。試写会では、映画に登場する予定の東松島市の大友貞夫さん、昭子さん夫妻が震災を語る。

（安田琢典）

がれきを分別する大友貞夫さん（左）、昭子さん夫妻＝宮城県東松島市、大西暢夫さん撮影

笑顔は忘れない

パチンコ店の従業員だった土佐薫さん(41)は、宮城県東松島市のJR陸前小野駅前にある仮設住宅で暮らす。「目の前にあるがれきは、ごみではない。たまたま壊れてしまっただけで、リサイクルするべきものなのだ。そう思わないと復興にはつながらない」

震災後に大型重機の免許を取得し、がれき分別の仕事で生計を立てている。分別するがれきの中に、友人宅の一部が含まれていたことがあった。

震災時は、津波に流された民家の屋根上で助けを求める知人3人の姿を見た大友貞夫さん(63)、昭子さん(65)夫婦は日々、地震速報に気をつける。傍らに大音量のラジオを置いているという。

今は、2人合わせて1万6千円の日当で、海岸近くにある漁網に絡まった木片やプラスチックを外す作業に汗を流す。「ここは海に近い。津波が来たら死を覚悟しないと」と昭子さん。津波に流された自宅を建て直すのが夫婦の夢だ。